

展覧会について

スマートフォンで撮影する時、そのUIがもはやシャッターの形態をイミテーションしていないことに気が付く。撮影者はカメラのアイコンを選択して撮影し、スワイプやピンチをしてトリミングをし、フィルタをかけるなど擬似暗室作業を繰り返してイメージを形作っていく。

そうして作られたイメージは、SNSの誕生と共に圧倒的なスピードで共有され、ディスプレイに表示されていく。instagramを上から下にスクロールしていく時、もはや「写真」という言葉のニュアンスに違和感を感じるほどに、そのイメージは加工/編集されている。しかし、写真を意味する「photography」はラテン語のphoto「=光」graphと「=画く」の意味と考えると、投稿者は自身がつイメージを描き、共有しているにすぎない。それは日本語の「写真」が本来の「photography」の意味に接近していることに気づかされる。

私はプロジェクターやスマートフォンから発する光を用いて撮影する。その行為はデバイスにアクセスする(=電源をつける)のと、シャッターを切る行為とはほとんど同義となっている。デバイスから発する光はただの事象であり、鑑賞者の被写体に対するバイアスを含んだ視点を拒否することになる。その被写体は実在しないものを撮影しているものが多い。それは私たちは、先ほど述べた各々が持つ「イメージ」を共有することと共通する。そこには被写体の実在するかなどは大した問題でない。それは、私たちは他者が作り出したイメージのなかで生活しているからである。SNS上で共有されるイメージと私が暗室で作り出すイメージ。そこにはある共通点をもってそこに存在している。

相川 勝